

イランの障害者を支援するミントの会 リハビリプロジェクト活動報告

～ 障害児デイサービスセンター アフターブ にて施設見学・ワークショップ ～

ミントの会理事 作業療法士
秋山佳世子

- ・実施日 : 2019年 10月 30日
- ・会場 : キャラジ市内 障害児デイサービスセンター アフターブ
- ・参加者 : アフターブ職員 (施設長の小児科医、看護師、理学療法士、作業療法士、障害当事者の職員) と通所している障害児 合計約50名

【内容】

① 施設見学 : イランで唯一、身体・知的・発達障害、全ての障害を対象とした障害児デイサービス施設。(通常は障害別に通所する施設が分かれている。) 約100名の子供達が登録されている。職員は23名。小児科医である施設長の「障害児は、他の障害を持った仲間と互いに助け合う機会を得る事が大切である」との信念に基づき、モンテッソーリ教育を土台とした療育が行われている。創意工夫に富んだ学習道具と、リハビリ・福祉用具は殆ど手作りであり、「手に入らない物は作ればいい」と情熱に溢れる施設長と職員の言葉が印象的であった。イランでは専門的な知識と情報、福祉器具などが入手困難であり情報が欲しいと希望があった。



絵画を通して自己表現・自信を育む



野菜を育て触覚・目と手の協調性を育む



文字の学習 砂箱で文字を書いて学ぶ



数字の計算を学習する。木製の数字板。



「立つための練習は遊ぶために」ゲームに取り組みながら立位・バランスの訓練。用具は手作り。



コミュニケーションが苦手な子供にはぬいぐるみを使ってやりとりする。
施設長で小児科医のバファル氏

②買い物実習の同行 : 施設近くの店に行き、買い物実習を実施。

買い物を既に体験している高学年の2人がリーダーとなって、低学年の2人をそれぞれサポートする役割を持つ。店内に入ると、職員が指定した物を探す、選ぶ、確認する過程を協力して実施。ジュースなど商品の絵を見て分かる物を指定するなど、職員はその子供の能力に応じて課題を調整。高学年の2人はサポートする役割で責任感と自信を育み、また、分からない時は店員さんに聞いて教えてもらうなど他者に助けを求めることも体験する。最後に皆で話し合っ、おやつを選び購入。往復の移動は、低学年の2人が安全に・注意が逸れないように歩けるよう、高学年の2人で挟んで歩いた。施設で学んだことを、買い物実習を通して体験し、生活技能を身につけていく。実社会で体験することはとても大切であると思いました。



③ポッチャ体験会 :ユニバーサルスポーツであり、パラリンピック競技種目であるポッチャ体験会を実施。初めてのポッチャであったが、ルールをスムーズに理解でき、ボールを投げる力も徐々にコントロールできるようになりました。脳性麻痺の少女が投球し易いようにその場でボードを使って調整。最初は緊張している様子であったが、慣れると笑顔ではしゃいで盛り上がり、皆で新しい挑戦を楽しむことができた。最後に、ミントの会からポッチャの用具一式をアフターブで活用して頂くよう、贈呈しました。



④ 自助具の紹介・自助具作成のレクチャー

神奈川リハビリテーション病院の辻村リハビリ工学士により、プラスチック粘土を紹介し自助具作成のデモンストレーションを実施した。“お湯につけると軟らかくなり、冷めると固まるプラスチック粘土を初めて見た。いろいろ使えそう”と好評でした。また、日本から持参した様々な自助具を紹介。スタッフが一つ一つ写真を撮り、「同じ物を作ります」と熱心に触れていました。



⑤折り紙で交流。

日本の障害者・ご家族のみなさん、看護師・理学療法士・作業療法士が作った折り紙作品と、小学生の親子から預かったお手紙を手渡し、イランの障害児者・支援者のみなさんを応援する気持ちを伝えました。大変感激して頂き、お礼のメッセージと手紙を書いてくれた小学生の男の子には人形を頂きました。こうしてイランと日本の人々が繋がり、交流が深まることに感謝いたします。

